

## 2019年度学内版 GP 成果報告書

|  |  |
|--|--|
| 取組名称   | 学芸員養成・理学部自然科学系の授業・実習等と自然科学館の連携プロジェクト：国際ネットワークへの標本情報接続化および館外サテライト出展   |
| 実施組織<br>(または対象のカリキュラム)   | 理学部・自然科学館  |
| ※連携する他学部・機関がある場合は記入  | 附属図書館、国立科学博物館  |
| 実施責任者(所属)  | 東城 幸治 (学術研究院・理学系)  |
| 取組の目標  | 学芸員養成課程の各授業や理学部開講の自然科学系授業・実習等を通して、(1) 自然科学館所蔵の学術標本の価値やその維持管理法を体系的に修得するとともに、自らも標本作成に関するスキルを身につける。(2) これらの標本情報を国立科学博物館との連携のもとに国際的なデータベース (GBIF, S-Net) への接続を図る。(3) 自然科学館収蔵標本を学術研究に利活用する。(4) 自然科学館収蔵標本等を有効利用した企画展示 (サテライト展示) を実現させる。(5) これらの一連の活動を通じて、学生の主体的学習意欲の向上や達成感の醸成を目指す。   |
| 1.<br>目標達成のために行った活動と成果<br>(箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする) | <p>(1) 学芸員養成課程等の授業・実習に加え、学生有志による課外での取り組みにより、計画通りに標本作成や維持管理を遂行した。外部からの標本受入やそのデータ整理作業を学生と協働で実施した (関連記事添付)。</p> <p>(2) 学芸員養成課程の終了学生を中心に、国立科学博物館との連携のもと、国際的データベースに 2.75 万点の植物標本データのリンク作業を実施した。加えて、動物標本や化石標本についても、将来的な国際的データベースへのデータ改変を見越したデータスタイルの変換作業に着手した。</p> <p>(3) 自然科学館収蔵の標本に基づく学術研究への利活用についても学生との連携により実現し、学術論文としての公表のほか、メディア (新聞) でも取り上げられた。特に、信州大学開学以前の前身校時代から管理されてきた作成から 100 年以上が経過した高山植物標本 (コマクサ標本、イワオウギ標本) からの遺伝子解析に成功し、この課題に取り組んだ学生の研究は専門家からも高く評価された。また、博物館収蔵標本の利活用に関する公開シンポジウムを開催し、多くの学生がスタッフとして運営に関わった (関連記事添付)。</p> <p>(4) 信州大学 70 周年・松高 100 周年記念事業とも関連づけた特別展 (松高 OB・北杜夫氏に) を、記念式典 (まつもと市民芸術館) ほか、あがたの森文化会館内の旧制高等学校記念館、松本市立中央図書館、松本市立窪田空穂記念館において開催した。これらのサテライト企画展開催に際し、多くの学生が、展示パネルの作成や展示作業そのものに参画・協力した (写真添付)。</p> |

|  |  |
|--|--|
|  | <p>(5) 当初の計画には盛り込んでいなかった野外学習会（生物・地質学分野）のスタッフ（講師）として、多くの学生が積極的に運営に参画・協力した。</p>  |
| <p>2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望<br/><br/>(達成の度合いを選び、そう評価する理由と今後の展望を記述)</p> | <p>○a. 達成できた<br/> <del>b. おおよそ達成できた</del><br/> <del>c. 半ば達成できた</del><br/> <del>d. おおよそ達成できなかった</del><br/> <del>e. 達成できなかった</del></p> <p>(評価理由) 計画していた事業のほぼ全てを計画通りに（事業によっては計画以上に）実施した。これらの自然科学館の活動を介して、多くの学生が楽しみながら、自主的・積極的な事業への参画を行い、実際に大きな貢献を果たし、次年度以降にも繋がる多くの成果が得られた。</p> <p>(今後の展望) 自然科学館収蔵標本の利活用を始め、企画展のサテライト出展については、より規模を拡大しながら展開できそうな段取りまでできている。また、標本情報の国際的データベースへのリンク事業については、これまでの3年間の国立科学博物館との連携を活かしながら、継続することが内定している。</p> |